

社説

紡績業の前途

日本の紡績業は近年著しく興進して現在運轉の盛況殆んど八十萬に達し一年の綿糸産出高は五十餘萬俵に及ぶのみならず目下擴張著しくは新設中のものも退々出来て來年四五月の頃に至れば凡そ百十餘萬俵の運轉を見る可しとのみならず綿糸の産額も隨て増加して七十餘萬俵に達す可しと云ふ而して其需用如何を問ふに内地にて消費する高は通例三十五萬俵のよしなれば其餘は海外に向て販路を求めざるを得ず即ち今日のまゝにても十數萬俵、來年に至れば四十餘萬俵を清國に輸出せざるを得ず前途果して困難なきか目下日本の經濟社會は漸く秋色を呈し金融漸く逼迫して物價の騰貴は依然たり隨て紡績業の如きは實行果敢々々しからざるに付ては既に不如意を感ずる會社もある可し或は原料たる綿の相場も綿價と共に下落したるが故に今日の綿にて綿を製して今日の相場に賣れば敢て引合はざるに非ざれば既に高き價にて買入れたる原料は少なからざるよしなれば綿價大に騰貴するに非ざれば一時の難儀は到底免る可らず且つ支那の商況を聞くに今や同國は戰敗後の不景氣にて百餘の商賣みな不振の淵に沈み居ると云ふ左もある可し如何に大國なればとて幾十萬の兵を動かして幾億の金を費して其影響を感ぜざるの理由ある可らず特に日本が金貨本位を實行すると共に銀の價は著しく下落して銀貨國に對する商賣は自から困難を爲りしのみならず元來支那は銅貨本位の國にして同國境に於ては銀を以て取引すれば内地の人民は銀貨を買ふにも金貨を求むるにも皆銅貨を以てするものと然るに近年銅貨非常騰貴したるに戰争の騒ぎなきて支那政府は數年間銅貨を鑄造せざるが上に之を鑄造し地金として賣買するものさへありて銅貨の欠乏は一方ならずと云ふ旁々以て紡績業の如きも自から下等ざるを得ず然れども又一方より考ふれば商賣の浮沈は珍しからぬ事にして日本の經濟界も常態に歸する時ある可く支那の不景氣も回復するものとある可きのみならず紡績業の如きは日常の必需品にして何時までも買はずに済む可きものに非ざれば遠からずして其需用は舊に復するものと云ふ現に停滯せる綿糸の意外にも此程大に賣行きたりと云ふ紡績業の前途必ずしも憂ふるに足らざれば然れども綿糸を製するは獨り日本のみならず目前に印度と云へる強敵あり之に打勝つべしと非ざれば到底困難を免るべしと云ふ能はず昨年中國へ輸入したる綿糸の總額は五十萬九千餘俵にして内日本より輸入したる高は僅に三萬八千餘俵に過ぎず其餘の四十七萬餘俵は皆より輸入したるものなり然るに前にも記す如く來年に至れば我産額は大に増加す可しが故に三四十萬俵も輸出するに非ざれば需用供給の平衡を保つと能はず而して三四十萬俵を輸出するには清國の市場より殆んど一切の孟買綿を驅逐せざるを得ず我紡績業者に果して斯の如き力あるか本年は孟買綿の輸出高を遂にして十月迄に既に九萬四千餘俵を賣りたるよしなれば是れは印度に黒死病流行して孟買の輸出大に減じたるを當時日本は尚ほ銀貨本位にして、貿易に付て特別の便利ありしに因るものにして今年日本も印度と同じく金貨本位の國と爲り黒死病流行の如き不時の出来事は勿論、待てるに足らずとすれば今後競争の勝敗如何は一に工業の優劣に依て決するの外ある可らず今、日本は印度よりも清國に近くして我紡績業は近年發達したるものなるが故に其機械の如き或は彼に勝る所ある可しと雖も去る代りに彼は手元に原料を有するのみならず其資本は我よりも遙に安きが故に決して傷む可らず其他事業の監督、技術の巧拙、職工の働き方、賃金の高低等みな此事業の要素にして一々精細に調査するに非ざれば容易に其優劣を知る可らず當業者の宜しく研究す可き所にして其研究の結果もしも我に全勝の見込あれば至極結構なれども萬一然らざる場合は如何にす可きや事業を縮小するか或は其方針を變ずるか兎も角も之に處するの道を講ぜざるを得ず今日我紡績業社が主として製造する所のものは二十手以下の太糸にして細糸は今尚ほ外國より輸入するとなり其然る所以は太糸の方、利益多きが故にして今日まで其れにて宜しかりしかども果して前途に困難あらば一步を進めて細糸の製造に着手せざる可らず細糸の輸入は年に一千萬圓もある可し此輸入を防ぐは一廉の仕業にして實際家の説に據れば假令は是れまで太糸製造に於て得たるが如き利益は期し難しとするも成功は疑ふ可らずと云ふ斯くて細糸を紡出すると共に又綿布の製造に着手せざる可らず紡績業は單に支那のみに限らず天下至る所の需用者を見ざるはなし今日まで紡績業は甚だ好況なりしが故に此點に着眼するもの少なりしかども果して前途に困難あらば自から織布の計畫なきを得ず事の初めに於ては十分の利益を見るものと雖も織布の際に困難するは獨り織布に限らず總ての事業みな同様にして追々熱帯を得るに隨て相應の利益ある可きは疑ふ可らず既に紡績業に於て成功し毛織業の如きも大に發達の徴候を示したる今日日本に於て獨り綿布の製造に限り他と競ふ可らざるの理由ある可らず紡績業は假令以て分多量なりとするも同時に織布業に着眼せざる可らず況んや其前途に於て必ずしも困難なきに非ざるに於てを紡績業今日の厄運をして斯業進歩の機會たらしめんものと我輩の希望する所なり

北越の近事

特派員 對馬 錦之助

新潟市の所謂停車場問題に轉じて遂に爆裂事件となるや其しく世人の注意する所となり資本家なるもの間に一種の恐怖心を惹起し其結果北越鐵道株の暴落となれり余の新潟市に到るや先づ該事件の由來及び其相と探究せん爲め新潟派及び北越派(沼澤派と言はす)の有力者數人に就きて各々其主張を陳べりたる所を聽き得たるを以て事の由來及び其真相を述べん

新潟市と沼澤町の關係 所謂停車場問題の由來する所以は蓋し一朝一夕の事にあらず 詳に其次節を記さん 新潟市は元々今の牧野子爵(舊長岡藩主石高七萬四千石)の領地にして信濃川對岸の沼澤町は今の溝口伯爵(舊新潟藩主石高五萬石)の領地にして今(の)所の沼澤町は百年前沼澤町民の領地を圍らん爲め船の出入を便利にせんとして運河開鑿を企圖したりしが沼澤町民は其己れに不利なるを知り藩主牧野氏が藩府長老の重鎮に在るを幸ひに藩主の威力を藉りて沼澤町民の企圖を中止せしめたり其後牧野家の領分過大なりの故を以て新潟市の割かれて藩領となるや市民は益々威力を恣にし他町村の計畫にして市に不利なるものあれば堪はず是非の曲直を問はず敢て我意を逞したる事實紛々からざるも當時の藩政は威力の強弱に由りて決定するもの習なれば沼澤町民は憤を吞んで黙從し來りたり沼澤町民の眼中に沼澤町は今も猶古の如し多年歴史的に養成されたる此心は停車場問題の紛議を激成せしめたるの形跡あり

○教

新任校長 沼澤町立第一小學校 校長 沼澤町立第一小學校 校長 沼澤町立第一小學校